

# 『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第 13 回 第 4.4.3 節～第 4.6 節

2018 年 7 月 1 日

小 田 勝

114 頁「4.4.3 被使役者の格表示」は、他動詞の場合ニ使役に、自動詞の場合ヲ使役になるという話。用例を 1 つ追加しておく。

- ・みちのくの十<sup>と</sup>綜<sup>ふ</sup>の菅<sup>すが</sup>薦<sup>ごも</sup>七<sup>な</sup>綜<sup>な</sup>には君を寝<sup>ゝ</sup>させて我<sup>み</sup>三<sup>み</sup>綜<sup>な</sup>に寝ん（夫木和歌抄）

次例は、自動詞のニ使役の用例で、珍しい。

- ・これを最後ぞかしと思ひけるに、目もくれ心も乱れけれども、たまたま泣き止<sup>や</sup>み給ひける幼き人にまた泣かせ奉らじと（保元・金刀比羅本）

115 頁「4.4.5 無意志的な使役の用法」。用例(1)(2)の類例をあげる。

- ・逢ふことはまばらに編める伊予<sup>いよ</sup>簾<sup>すだれ</sup>いよいよ我をわびさするかな（詞花 244）

116 頁用例(9)は初刷・第 2 刷に「吹きならせて」とあるが、「吹きならせて」の誤記で、第 3 刷で訂正されている。用例(10)の上の「なお」以下は、本連載第 3 回で新設した「2.5.3 意志動詞の無意志的用法」に移される。

さて、116 頁「4.4.6 「す／さす」「しむ」の接続の違例」から次々節にかけては、適切でない挙例が多くあって、お詫び申し上げる次第である。まず、117 頁の用例(12)(13)について、これは「参らせさす>参らツさす」と変化した、その促音の無表記形と考えられる。そのことは、本書 584 頁下方の◆にきちんと述べてあるのだから、ここに「接続の違例」としてこれをあげたのは、適切ではなかった。類例をあげておく。

- ・されば宸筆の御願書を、七条の座主の宮へ参らせせましましければ（保元・古活字本）
- ・法皇寝殿の橋がくしの間へ御幸なッて、待ち参らせせ給ひけり。（平家 4・巖島御幸）

117-118 頁用例(22)～(26)は確かに「動詞の未然形+さ+しむ」の例だが、次の(27)だけは、四段動詞「驚かす」の未然形「驚かさ」に更に「しむ」を付けた誤用というべく、ここにいう「接続の違例」ではない。同頁「4.5 ヴォイスの重複」の用例(4)(5)(7)は受身の重複であるという説明がなされているが、これは「自発+受身」と捉えるべきだろう（「ヴォイスの重複」には違いないが）。119 頁用例(15)の「れ」は尊敬と思われるので不適切、同頁「4.6 ヴォイス形式と表意の齟齬」の用例(2)は、「[入ラシテ] 象に鞍置かせむとて見れば」と読めるので、これも適切な例とはいえない。

以上を要するに、117 頁用例(12)(13)、118 頁用例(27)、119 頁用例(15)、同頁用例(2)の5つが不適切な挙例であった。出来るだけ変わった例をあげようとしたのだが、たそかれ時の空目であった。まことに申し訳なく、お詫び申し上げます。

さて、「ヴォイスの重複」ということでは、次例は、「使役+可能」だろうか。

- ・「我(=清盛ガ)〔叔父ノ〕忠正を斬りたらば、定めて義朝に父(=為義)を斬らせらるべし(=切ラセルコトガ出来ルニ違イナイ)。…」と腹黒に思はれけるこそおそろしけれ。(保元・古活字本)

章の最後に、一応、相互動詞の節を新設しておこう。

---

#### 4.7 相互動詞(新設)

「<sup>いさか</sup>諍ふ」「<sup>すま</sup>争ふ」「戦ふ」のように、(少なくとも)二人の人間が同時に(または交互に)働きかけあうことで初めて成立する動作を表す動詞を「相互動詞」という。「-あふ」「-かはす」「-しろふ」は、動詞に付いて、その動詞を相互動詞化する。

- (1) 限りなく遠くも来にけるかなとわびあへるに(伊勢9)
- (2) 大人になりになれば、男も女も恥ぢかはしてありけれど(伊勢23)
- (3) 〔母ハ〕背きぬる世の去りがたきやうに、みづからひそみ〔源氏ニ〕御覧ぜられ給ふと、〔子供達ハ〕つきしろひ目くはす。(源・夕顔)

◆相互動詞の敬語形は、誰への敬意か不分明になる場合がある。

- ・後の世には同じ蓮<sup>はぢす</sup>の座をも分けんと、〔源氏ト紫上ハ〕契りかはし聞こえ給ひて(源・御法)

---

120 頁用例(3)の類例、

- ・染むれども木の葉は風に誘<sup>ひ</sup>ひ(=誘ハレ)けり袖の色こそしぐれ(=涙デ赤ク染マリ)わびぬれ(=ツラク思ッテイル)(風葉和歌集)

同頁用例(4)(5)の類例。bの方の「慣<sup>な</sup>らはし」は、「慣<sup>な</sup>らはされ」の意である。

- ・a そよ、〔アナタノ嫉妬ハ〕誰が慣<sup>な</sup>らはしにかあらむ。思はずにぞ見え給ふや。(源・濤標)
- b 忘らるる身は慣<sup>な</sup>らはしの夕暮もよそには聞かぬ庭の松風(続拾遺1030)

今回は訂正の多い回になってしまった。次回からは「第5章 時間表現」に入る。

[出典追加] 風葉和歌集②鎌倉中期③岩波文庫『王朝物語秀歌選』